

ね ぎ

1 予報（7月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
さび病	-	やや多	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高かった。(+) (2) 7月の降水量は平年並か多い予報であり、感染に好適な条件である。(+)
べと病	-	並	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生は見られなかった。(－) (2) 7月の降水量は平年並か多い予報であり、感染に好適な条件である。(+)
黒斑病・葉枯病	-	やや多	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高かった。(+) (2) 7月の降水量は平年並か多い予報であり、感染に好適な条件である。(+)
ネギコガ	やや早	第3世代 やや多	(1) 有効積算温度から推定される第2世代の羽化始期は平年よりやや早い。 (2) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高かった。(+) (3) 7月の気温はほぼ平年並の予報であり、特に増殖を助長する条件ではない。(±)
ネギハモグリバエ	-	多	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率、被害度ともに平年より高かった。(++) (2) 7月の気温はほぼ平年並の予報であり、特に増殖を助長する条件ではない。(±)
ネギアザミウマ	-	多	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率、被害度ともに平年より高かった。(++) (2) 7月の気温はほぼ平年並の予報であり、特に増殖を助長する条件ではない。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

○ネギハモグリバエ、ネギアザミウマが多発しています。「令和3年度病害虫発生予察情報注意報第3号（令和3年6月25日発行）」を参照し、直ちに効果の高い薬剤を散布しましょう。

【共通事項】

- (1) 圃場をよく観察し、被害の早期発見に努める。
- (2) 茎葉散布は散布ムラが生じないように畝の両側から丁寧に行う。
- (3) 発生源となる被害残渣や雑草等を圃場から持ち出して処分する。

【ネギハモグリバエ】

- (1) 発生が目立つ場合、ベネビアODやグレーシア乳剤で防除する。

【ネギアザミウマ】

- (1) 発生が目立つ場合、ベネビアODやグレーシア乳剤、ディアナSC、ファインセーブフロアブル、ハチハチ乳剤等で防除する。
- (2) 高温条件下では世代の経過が早い（25℃では16～17日程度で1世代経過）、散布間隔が空かないよう注意する。
- (3) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤でローテーション散布を行う。



図1 ネギハモグリバエによる被害葉
左:A系統、右:B系統
(左:「いわての農作物病害虫図鑑」より抜粋)



図2 ネギアザミウマによる被害葉
左:被害程度【中】、右:被害程度【甚】

【べと病】

- (1) 降雨が続くと発生が助長されるので、定期的な防除を行う。
- (2) べと病の病斑には葉枯病（褐色斑点病斑、黄色斑紋病斑）が二次的に感染するため、予防散布に努める。

【さび病、黒斑病、葉枯病】

- (1) 降雨が続くとこれらの病害の発生が助長されるので、定期的な防除を行う。
- (2) 肥料切れすると発病しやすいので、適切な肥培管理に努める。
- (3) 葉枯病（褐色斑点病斑）は、ネギハモグリバエの食害痕上に二次的に感染している事例が確認されているため、栽培期間を通してネギハモグリバエの防除を徹底する（R 2-2病害虫防除技術情報参照）。



図3 さび病の病斑



図4 べと病の病斑

【ネギコガ】

- (1) 有効積算温度から推定される第3世代の防除適期は、県中南部で平年よりやや早い7月第1半旬である。

3 防除上の注意事項

- (1) 収穫期に近い作型では、使用基準に注意して薬剤を選択する。
- (2) QoI剤は、耐性菌の発生リスクが高いため年2回以内の使用とし、使用する場合は連用とならないように注意する。